

悠悠莊

芥川龍之介

青空文庫

十月のある午後、僕等三人は話し合いながら、松の中の小みちを歩いてきた。小みちにはどこにも人かげはなかった。ただ時々松の梢こずえみよこりに鶉うずらの声のするだけだった。

「ゴオグの死骸のを載せた玉突台たまつきだいだね、あの上では今でも玉を突いているがね。……」

西洋から帰って来たSさんはそんなことを話して聞かせたりした。

そのうちに僕等は薄苔うすげのついた御影石みかげいしの門の前へ通りかかった。石に嵌めこんだ標ひょう札ようさつには「悠々荘ゆうゆうそう」と書いてあった。が、門の奥にある家は、——茅葺かやぶき屋根の西洋館

はひっそりと硝子窓ガラスを鎖とぎしていた。僕は日頃ひごろこの家に愛着あいせきを持たずにはいられたなかった。

それは一つには家自身のいかにも瀟洒しょうしやとしていたためだった。しかしまたそのほかにも荒廢こうはいを極めたあたりの景色に——伸び放題ほうだい伸びた庭芝にわしばや水の干上ひあがった古池ふるせに風情ふうせいの多いためもない訣わけではなかった。

「一つ中へはいつて見るかな。」

僕は先に立って門の中へはいった。敷石はきを挟んだ松の下には姫路茸ひめじだけなどもかすかに赤らんでいた。

「この別荘べつそうを持っている人も震災以来来なくなつたんだね。……」

するとT君は考え深そうに玄関前の萩に目をやった後、こう僕の言葉に反対した。

「いや、去年までは来ていたんだね。去年ちゃんと刈りこまなけりや、この萩はこうは咲くもんじゃない。」

「しかしこの芝の上を見給え。こんなに壁土も落ちていいるだろう。これは君、震災の時に落ちたままになっているのに違いないよ。」

僕は実際震災のために取り返しのつかない打撃を受けた年少の実業家を想像していた。それはまた木蔭のからみついたコッテエジ風の西洋館と——殊に硝子窓の前に植えた棕櫚や芭蕉の幾株かと調和しているのに違いなかった。

しかしT君は腰をかがめ、芝の上の土を拾いながら、もう一度僕の言葉に反対した。

「これは壁土の落ちたのじやない。園芸用の腐蝕土だよ。しかも上等な腐蝕土だよ。」

僕等はいつか窓かけを下した硝子窓の前に佇んでいた。窓かけは、もちろん蟬引だつた。

「家の中は見えないかね。」

僕等はそのなことを話しながら、幾つかの硝子窓を覗いて歩いた。窓かけはどれも嚴重に「悠々荘」の内部を隠していた。が、ちょうど南に向いた硝子窓の框の上には薬壘

が二本並んでいた。

「ははあ、沃度劑ヨオドジを使っていたな。——」

Sさんは僕等をふり返って言った。

「この別荘の主人は肺病はいびょう患者かんじやだよ。」

僕等は芒すすきの穂を出した中を「悠々荘」の後ろへ廻まわって見た。そこにはもう赤錆あかさびのふいた亜鉛葺とたんがきの納屋なやが一棟ひとむねあった。納屋の中にはストオヴが一つ、西洋風の机が一つ、それから頭や腕のない石膏せっこうの女人像にょにんぞうが一つあった。殊にその女人像は一面に埃ほこりにおおわれたまま、ストオヴの前に横になつていた。

「するとその肺病患者は慰なぐさみに彫刻でもやつていたのかね。」

「これもやつぱり園芸用のものだよ。頭へ蘭らんなどを植えるものでね。……あの机やストオヴもそうだよ。この納屋は窓も硝子ガラスになつてゐるから、温室の代りに使つていたんだろう。」

T君の言葉はもつともだった。現にその小さい机の上には蘭科植物らんかしよくぶつを植えるのに使うコルク板の破片も載せてあつた。

「おや、あの机の脚の下にヴェクトリア月経帯げっけいたいの缶もころがつている。」

「あれは細君の……さあ、女中のかも知れないよ。」

Sさんは、ちよつと苦笑して言った。

「じゃこれだけは確實だね。——この別荘の主人は肺病になって、それから園芸を楽しんでいて、……」

「それから去年あたり死んだんだろう。」

僕等はまた松の中を「悠々荘」の玄関へ引き返した。花^{はな}芒^{すすき}はいつか風立っていた。

「僕等の住むには広過ぎるが、——しかしとにかく好い家^{うち}だね。……」

T君は階段を上りながら、独^{ひとりごと}言^{こと}のようにこう言った。

「このベルは今でも鳴るかしら。」

ベルは木蔭^{きかげ}の葉の中にわずかに鉦^{かね}をあらわしていた。僕はそのベルの鉦へ——象牙^{ぞうげ}の鉦へ指をやった。ベルは生^{あいにく}憎^{にく}鳴らなかつた。が、万一鳴つたとしたら、——僕は何か無^ぶ気^き味^みになり、二度と押す気にはならなかつた。

「何^{なん}と言^{こと}つたつけ、この家の名^なは？」

Sさんは玄関に佇^{たたず}んだまま、突然誰^{たれ}にもなしに尋^{たず}ねかけた。

「悠々荘？」

「うん、悠々荘。」

僕等三人はしげらくの^{あいだ}間、何の言葉も交さ^{かわ}ずに茫然と玄関に佇^{たたず}んでいた、伸び放題伸びた庭芝^{にわしば}だの干上^{ひあが}つた古池だのを眺めながら。

(大正十五年十月二十六日・鶴沼)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「サンデー毎日」

1927（昭和2）年1月

入力：j.utiyaana

校正：小林繁雄

2005年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

悠々荘

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>